

横浜市立都田西小学校

平成27年度 学力向上アクションプラン

1. 学校の状況と地域の実態

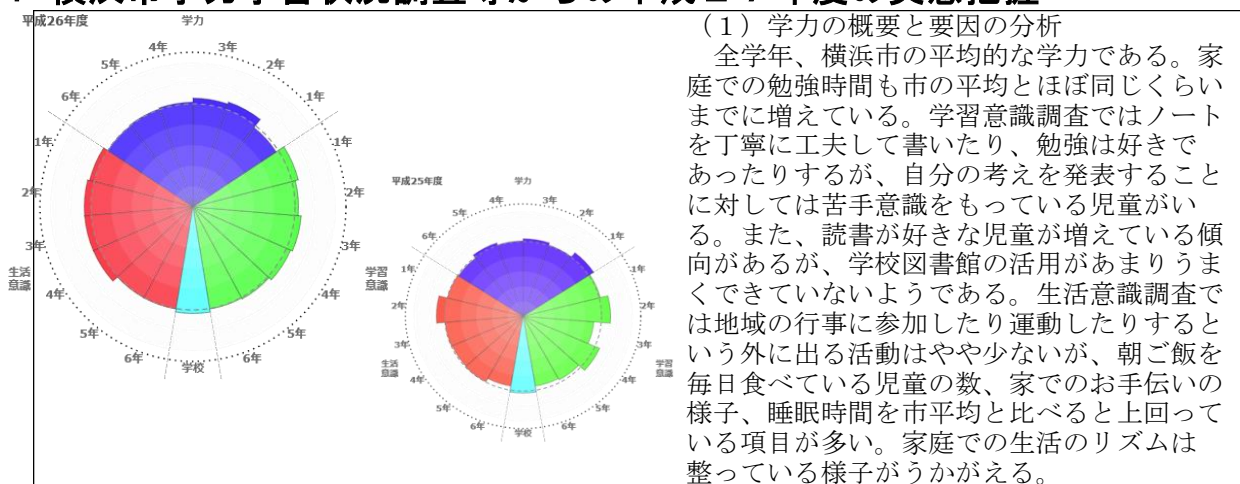
- ・授業研究を通しての教科の研究や学年研究での組織的な教材研究を行うことで学習指導の充実を図っている。
- ・比較的経験の浅い教員が多く、基礎的な指導技術を身に付ける必要がある。
- ・特別支援教育について、取り出し学習など個に応じたきめ細やかな対応を行っている。また算数科では少人数指導も行い、一人ひとりに寄り添った指導を行っている。
- ・家庭での基本的な生活リズムが整っている児童が多い。
- ・低学年では地域ボランティアを積極的に活用するようにしている。また、保護者のボランティア活動も盛んである。

2. 3年間の方向(中期学校経営方針)

学力向上に関する指導の目標・方針(平成27年度末の姿)

- 言語活動の充実を図ることにより、自分の考えを表現したり聞いたりする力が充実し、また基礎的・基本的な知識や技能、思考力・判断力・表現力が育成されています。
- 特別支援教育、少人数指導等一人ひとりに寄り添った指導を引き続き行っています。
- 重点研究、学年研究等組織的に研修・研究を進めて、学級で落ち着いた授業ができる指導技術を教員が身に付けています。

3. 横浜市学力学習状況調査等からの平成27年度の実態把握



(2) 教科学習の状況

- 国語科**：全学年を通して、自分の考えを表現する「話す・聞く」力がやや低い。活用力は、低学年では低いが中・高学年では平均を上回っている。基礎・基本の力の定着が今一步のところである。
- 算数科**：どの観点でも市の平均と同じくらいである。「数学的な考え」や活用力が高まってきている反面、基礎的な計算や作図などの「技能」が低い学年がある。
- 社会科**：全体的にどの観点も市の平均と同じかやや下回っている。社会を好きだと感じている児童も他の教科と比べると低くなっている。
- 理科**：中学年ではどの観点でも市の平均と同じくらいだが、高学年では、全体的に市の平均よりやや下回っている。理科に対する意識は、他の教科に比べると低い。

(3) 経年変化の状況と要因の分析(学習・生活意識調査も含めて分析)

学校全体として学年間の学力のばらつきが少なくなり、概ね市の平均的な学力を身につけてきている。生活意識調査では、勉強が好き、ノートを丁寧に工夫して書いている、自分の考えを発表していると考えている児童が年々増加しており、重点研を始め学習に向けての様々な取り組みが児童の学習へ向かう意欲を作っていると考えられる。また、「自分には良いところがある」や「一生懸命取り組んでいることがある」などの項目も増加しており、自己肯定感も高まっていると考えられる。

一方で、自信をもって発表したり、意見を交換したりすることが苦手な児童がいることも確かである。基礎・基本の定着が不十分であったり、そこから自信をもって活動に取り組めなかったりする場合など、個に寄り添いながら授業改善を目指していきたい。

4. 平成27年度 目標と具体的方策

平成27年度 目標

基礎・基本の定着を図り、進んで表現し合うことのできる授業の実現

(1) 学校としての共通取組

- 基礎・基本の定着
各学年で実態に応じた学習形態や指導方法で基礎・基本の力が身に付くような指導を行う。
- 言語活動の充実
授業の中で言語活動を意識的に取り入れ、自分の考えを進んで表現し合うことができる授業を行う。
- 特別支援教育の充実
困り感のある児童の理解を深めるために研修会を行うとともに、一人ひとりの児童に寄り添えるような授業形態をとれるようにする。
- 研修・研究の充実
研究部や学年等の組織を生かして研修、研究を行っていく。

(2) 学年・教科等としての取組

1 学年

・国語は、話す・聞く領域でも、特に聞く力が低い。まだ、学習に集中して取り組む習慣が身につけていないので、一つ一つの作業に取り組む時間を徐々に伸ばし、集中力を持続させる力をつけていきたい。そして、それを「聞く力」につなげていきたい。

・算数では、0～10までの数を数えたりかいたりすることはよくできている。これから、基礎基本の力を活用したり、具体的な操作をしたりして、いろいろな考え方ができるようにしていきたい。

2 学年

・国語は、どの力も市の平均を下回っている。特に読むの領域が低い。何を聞かれているのか、どのように答えたらよいかを確認しながら学習を進める必要がある。書く領域でも、読み取りが大きく関係している。始め・中・終わりの意識できるように、あのね帳などを通して書くことに慣れていく必要がある。

・算数は、おおむね市の平均を上回っている。しかし、国語に関連するが、読み取りが苦手なので、基礎基本を応用に活かせるように、引き続き指導していく。

3 学年

おおむね市の平均を上回っている。

・国語：言語についての知識・理解・技能が、市の平均よりも低い。漢字やひらがな、「てにをは」の表記などについて、繰り返し練習をする必要がある。

・算数：図形の領域で、市の平均を下回っている。正しく長さを測る、ものさしで直線を引くことを繰り返し練習するとともに、直角三角形などの作図を練習する必要がある。

4 学年

・どの教科も平均を上回っている。

・国語は書く能力で7ポイント上回っている。中でも推敲する力が平均よりかなり高い。

・算数はほとんどの力が平均を上回っているが、量と測定における技能が、下回っている。生活経験を豊かにして量感を身に付けたり、測定する活動を多く取り入れて、技能的な習熟が進むよう学習計画を立てることが必要と思われる。

5 学年

・国語・社会・算数においては、どの力も市の平均と同じくらいやや上回る傾向にある。その中の算数では、数学的な考え方がよくできているが、量と測定・図形領域の技能がやや低い。実際に測ったり作図したりする学習経験を積み重ねていく必要がある。

・理科は、どの力も市の平均を下回っている。特に、科学的な思考・表現の力と活用力が低い。

実験・観察したことを、身近な生活と結びつけて考える力をつけていくことが課題である。

6 学年

・どの教科も、市の平均と同じくらいやや下回っている。算数の基礎基本のみ、平均値を上回っている。領域ごとにみていくと、身近な生活と結びつけて考え、自分事としてとらえやすい内容（動物の誕生、農業、水産業など）は平均値を上回っている。

・算数では少人数指導を行い、一人ひとりに基礎基本の力を付けたり、個に応じた指導を行ったりする。

・ノート指導では子供の考えを価値づけたり深めたりすることで、自己肯定感をもたせる。

個別支援学級

- ・一人ひとりの実態に応じた内容の学習や反復学習をして個別の指導を大切にする。
- ・個別の教育支援計画・個別の指導計画に基づき、話し言葉、表情、仕草、書き言葉等、子どもの実態に応じた適切なコミュニケーション手段を日常的に指導し活用できるようにする。
- ・子どもの実態に応じた分かりやすい言語環境の整備を行うようにする。
- ・少人数で集団活動の場を作り、自分の意見を伝えたり、友だちの意見を聴いたりする体験ができるようにする。